

都大路を駆ける

第63回全国高校駅伝大会（男子）は、京都市右京区にある西京極陸上競技場をスタートし、京都国際会館を折り返して同陸上競技場をゴールとする7区間42・195^キで行われました。初出場となった県立松浦高等学校陸上部。あこがれの「都大路」を全力で駆け抜けました。



（長崎新聞社提供）

【総合順位】 33位 2時間10分24秒
【個人成績】

1区 (10 ^キ)	坂本 竜平 (3年)	30分49秒	③5
2区 (3 ^キ)	阿比留和弘 (1年)	8分49秒	②9
3区 (8.1075 ^キ)	宮本 仁徳 (2年)	25分7秒	③0
4区 (8.0875 ^キ)	恋塚 斗貴 (3年)	25分30秒	③9
5区 (3 ^キ)	大石 凌 (2年)	9分25秒	④3
6区 (5 ^キ)	松村 脩平 (2年)	15分33秒	②8
7区 (5 ^キ)	久枝 大寛 (3年)	15分11秒	②0

※○は区間順位

意気揚々と京都に集結！

高校駅伝を走る選手にとつてあこがれの舞台となる京都「都大路」。今年も各県の代表校が集まりました。

全国高校駅伝大会の開会式がレース前日の12月22日、京都市体育館（ハズアリーナ）で開催されました。

松浦高校陸上部は、女子代表校の諫早高校陸上部と共に、力強く堂々と入場行進を行いました。



心強い郷土の応援団も参上

松浦高校陸上部を応援しようと、本市からたくさんの方が京都に駆け付け、選手たちに熱い声援を送りました。



レース当日は本市からもたくさんの方が応援に駆け付け、陸上競技場や沿道などで、旗を振ったり、大きな声で声援を送ったりしながら、選手たちを応援しました。

つなげる襷 つなげる思い

初めて走る都大路。たくさん思いが込められた襷をつなぎ、懸命に走り抜いた7人のレースを振り返ります。

1区は全区間において距離が最も長く、各校のエース級が出揃う「花の1区」と呼ばれる区間です。

この区間には、主将の坂本君が出場しました。レース中盤までは快調な走りを見せ、全国の強豪チームと互角の走りを展開しました。6^キ付近の上り坂で集団のスピードが一気に上がると、対応しきれず少しずつ遅れをとったものの、後に続く走者のために粘り強く懸命に走り抜きました。

2区は全体的に下りとなるスピード区間。この区間には阿比留君が出場しました。襷を受け取ると初出場チームとして1年生ランナーらしく思い切りのいい走りです。3区に襷をつなぎました。

3区は、全体的に上りとなる区間で、6^キ過ぎには難所となる大きな跨線橋があります。

この区間には、宮本君が出場。6人を抜き去る積極果敢な走りでチームを盛り立て、次の走者に襷をつなぎました。

4区は、3区を逆に走る区間で、全体的には下りとなりますが、最後

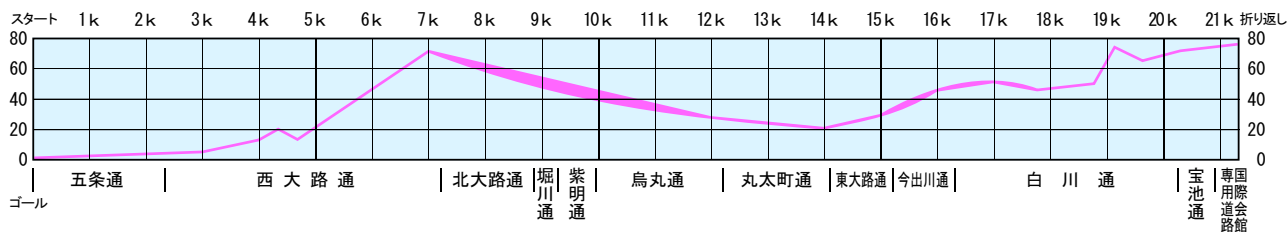
男子全国高校駅伝競走大会コース 42.195km

■区間と距離

第1区	10km
西京極陸上競技場 → 烏丸鞍馬口	
第2区	3km
烏丸鞍馬口 → 丸太町河原町	
第3区	8.1075km
丸太町河原町 → 国際会館前	
第4区	8.0875km
国際会館前 → 丸太町寺町	
第5区	3km
丸太町寺町 → 烏丸紫明	
第6区	5km
烏丸紫明 → 西大路下立売	
第7区	5km
西大路下立売 → 西京極陸上競技場	



■コースの高低図



に1キロの上りが待っています。
この区間を走ったのは、恋塚君。レースの中盤を迎え少しでも流れを好転させようと、気持ちを前面に出した走り、次の区間へ襷をつなぎました。
5区は、2区を逆に走る上りの区間。距離が短いので、どれだけ我慢してスピードを保てるかが重要です。この区間は大石君が走りました。
2キロまでは順調な走りを見せ、最後の1キロで若干足取りが重くなりましたが、襷をつなぐために全力を尽くしました。
6区は前半の3キロが上りで、後半2キロを下る難コース。
この区間には松村君が出場。襷を受け取ったあとは、しばらく数人の集団によるレース展開となり、なかなか自分のペースがつかめず、ラスト2キロの下りでは、思うようにはスピードに乗り切れなかったものの、最後の走者へ懸命に襷をつなぎました。



(長崎新聞社提供)

7区は、全体的に下りのスピード区間。順位が決まる最終区間であり、この区間を任せられた選手たちの勝負への執念が求められる区間です。
この区間を走ったのは久枝君。チームのために「1秒でも早く」「1つでも前に」と懸命な走りを見せ、ゴール後に倒れこむほどの全力を尽くしました。
初めて出場した全国大会。これまでにない夢の大舞台を経験し、松浦高校陸上部の歴史に新たな1ページが加わりました。
今回の大会は、監督・選手にとって実力を出し切れた満足のものといえるかもしれませんが、チームメートのために、そして皆さんの応援に応えるための最後まで諦めない懸命の走りは地域に感動と希望を与え、何より今後の陸上部の成長過程における大きな礎となったことは間違いありません。
この経験を糧に松浦高校陸上部は更なる高みを目指し走り続けます。